

## ウィリアム・ゴールドディングの最新作

原 裕 子

最近 William Golding の一冊の部厚い作品が出版された。題して *The Ends of the Earth; A Sea Trilogy* (1991) がそれである。この本は1980年に出た小説, *Rites of Passage* と, *Close Quarters* (1987), *Fire Down Below* (1989) の三つの作品をまとめて三部作としたものである。

この三部作は、1812年イングランド南部の港から、オーストラリアへ向う定期船の中での出来事で一貫している。この船は古い戦艦を一般の目的に適うように改造されたもので、少量の銃砲、船荷、動物、水夫、兵士、移民、それに数名の紳士・淑女を加えた混成の乗客と乗組員をのせている。その船に乗り合わせた Edmund Talbot は、英国殖民地での行政官として出向途中の貴族青年で、この人物を中心に三つの作品を通して話が進められてゆく。

しかし、第一作 *Rites of Passage* を書いたそもそもの起りを、ゴールドディングは次の様に説明している。

「インドの東海岸からフィリッピンまで護衛されて航海していた兵士たちの一団に混って、一英国国教会の牧師がいた。或日、彼は酒に酔ってか、兵士たちや水兵たちの間を裸でふらふらして、それから自分のキャビンにもどった。そしてその二・三日後、彼は死んでいたのである。一人の人間にとって恥辱のあまり死に至ると言うことが可能である状況を作り出すことが、私にとって、私の心の安らぎにとって必要なことだと思った。」<sup>(1)</sup>

小説家の興味は、極限におかれた人間、孤立し、取りつかれた人間について熱中することである。恥という社会的にひき出された感情で死ぬという可能性は、ごく稀なことであるが、20世紀後半の吾々の社会に於て、想像することは特に珍らしく、困難なことの様に思われる。恥とは望ましくない、

また、実状にそぐわない感情である。

この一牧師とは、航海を最後まで果すことなく死んでいった Robert James Colley という青二才のみすぼらしい教区牧師として登場している。“Who killed Cock Colley?” と彼の謎の死をめぐる、その背後にある真理を探ってゆくのがこの小説の一つの見方かもしれない。

コリーの極端に走る傾向、彼の理想を追う馬鹿まじめさ、彼の苦悩と精神昏迷状態は、人間のおかれている立場をより充分に、より深く記されている。作家ゴールディングはこのことを余り真剣にとり扱うつもりはなく、喜劇的に、或は笑劇的に、様々な場面を織り込みながら話を進めてゆく。彼の理想とする考え方は、道徳的な生き物としての人間、そして欠点だらけの生き物としての人間、本質的には真面目なものであるということを、人間の愚かしさへの憐みを起させるものとして描くことである。

この第一作は三部構成で、最初の部分はトルボットの航海日誌という形をとり、コリーの死に至るまでと、その後の成り行きが述べられるが、中間部は書き残されたコリーの手紙で成り、その手紙は彼の死後読まれる。この手紙は航海のはじめにさかのぼり、トルボットによってすでに描写されていることについての新たな見通しの事件から書かれている。従ってトルボットの見解から二度はじまり、二度終ることになる。この二重の物語構造は、一人の人物からもう一人の人物と単に語りつがれるよりも、はるかに広く、より徹底した重要な含みをもつのである。吾々は「時間の経過する」時と「書いている」時の間を区別して読んでゆかなければならない。日誌と手紙は同じ事件に関してのトルボットとコリー二人の叙述である。トルボットがコリーの手紙を読む時と、吾々が読みはじめる時とは微妙なずれがあるし、内容的にも二人の見解のずれがあるのである。

トルボットはこの航海すべてをコリーのドラマとして見、船を “our floating theatre” と言っている。作者はこの船をドラマの舞台に作り上げ、そこでコリーが演じ、上級客たちは船尾の展望台の中に入って、舞台での行動をよりよく観察できる状態におかれている。一幕目は一般的な状況と、争

いのあらゆる可能性、特にコリーとトルボットの間の敵対意識——教会と国家とによって代表される——と、コリーと無神論者 Captain Anderson との間の敵対意識が述べられている。コリーの場合、明らかに船長アンダーソンが彼に対してもっている理由のない毛嫌い、といった状況設定が示される。

二幕目では、これから起る悲劇へと導かれ、それを予想させる場を見せる。コリーをめぐる多くの悪意ある影響へと、トルボットとアンダーソンによって任せられて、次々と馬鹿げたへまを犯してしまう。この二幕目では、コリーを死へと導くように、ぎょっとする様な不可解な出来事が舞台裏で演じられ、クライマックスに達する。それもコリー自身の意志として演じられるのだ。三幕では、これまでに起ったほとんどあらゆることが説明される長い大詰—終局—となる。

コリーの死にともなうアンダーソンの事実究明は、徐々に明らかにされることによって真理へと近づくかのように思われた。ところが、トルボットの日記によると、コリーの行動と死因について判決にもち込まれた時、彼は皆の前で恥辱を受けたというのではなく、結局、或水夫、或は複数の水夫が紳士たちに暴力行為を加えたので、彼はそのことで自殺したのだ、といういとも不透明な、たわごとめいた説明で一件落着し、同意されるのである。“Mr Colley is willing himself to death....I have known it happen among savage peoples. They are able to lie down and die.”<sup>(3)</sup>（コリー氏は死ぬことをいとわない。…蛮人の間ではこういうことはあるんだ。彼等は屈して死ぬことができるんだ。）という意見も述べられた。トルボットは「もし私が自分自身のおかれている立場の結果とか、うんざりする事の危険ばかりを考えていなかったら、彼を救うことができたかもしれなかったのだ。アンダーソンの職権 (commissions) と私自身の怠慢 (my own ommissions) の明白な説明がここにあるのだ」と言う。アンダーソンの職権とはコリーがアンダーソンの命じた内務規定 (Standing Orders) を読むことを怠ったために、この様な結果になったことを言っているのである。

ところが、残されたコリーの手紙には、この間の事情がトルボットの日記

とはくい違つて、こと細かく記されている。

「私は船長のいる所から離れるや、自分の体が冷汗でびしょりになった一顔は妙に熱っぽかったが。私は誰とも顔を合わせたくなかった。私は泣いた。自分の涙が男らしい激怒の涙であると言えたらいいのだが、実際は恥辱の涙であった。」そして、“On shore a man is punished at the last by the Crown. At sea the man is punished by the captain who is visibly present as the Crown is not. At sea a person’s manhood suffers.”<sup>(5)</sup>

王権は目に見えない権力であるが、船長という職権によって、人は目の前で刑罰を受けるのだ。コリーは自分のキャビンの外で、トルボットが「ある紳士〔コリーのこと〕が他人が虐待されているのを快く思っていない」と、若い少尉候補生に話しているのをはっきり耳にした。それでどっと涙が出てきたのだ、とコリーの手紙には書かれている。この涙は心が癒される、自由を勝ち得た感涙であり、この涙で彼のおもいは清められた。疲れ切つてはいたが、彼は打ち勝つたのだ。“And now, Captain Anderson, I will trouble you no further,”と決意し、この航海が終るまで船長を避けるために懸命の努力をしようと心に誓うのであるが、キリスト教徒である彼は、船長がいかにも悪魔のような、けもののような存在であれ、自分の義務として、使命として、彼を赦そうと思う。権力に対するコリーの最後の抵抗であり、自由への解放であった。

...the class system was axiomatic. You could not invade a plush bar simply by readiness to pay more. Nor could you descend to a less comfortable pub if you wanted to pay less. Where you were born, there you stayed. At the beginning—a sort of privileged babyhood—you could glimpse the other worlds. You could pass through doors marked First Class and see the wide bedrooms, the stupendous still lifes of sea food on the side tables of the dining-room....after that the doors were locked.<sup>(6)</sup>

ここでゴールドディングは定期航路で大西洋を横断した時の、うんざりする様なイギリス階級制度のあり方を述べている。いくらお金があっても上流階級の人々が占めている贅沢なバーには入れないし、いくら高いお金を払いたくなくても、船底の居心地のよくないパブに下りてゆくことはできないのだ。生れた時から上流階級はその運命が定まっている。

この小説で船は‘floating theatre’であると前に述べたが、一方では、船内の生活はイギリスの階級組織の縮図であるとも言える。船客は船尾に食堂のある後檣(mizzen mast)の周囲に設けられた24のキャビンに入っている。一般庶民、移民たちは前方のたまりの場所に、甲板を横切って白線で紳士・淑女から分離されている。船長と食事を共にすることはごく稀で、特権なのである。トルボットは人を格付けすることを強く意識はしても、彼の俗物根性とか階級意識は、彼を全く駄目にしてしまうほど根深くはない。コリーは手紙の随所で、船内での自分の居場所について、船長をはじめとする上流階級の人々の目を意識している。“The people at this end of the ship are gathered on the quarterdeck. Only I am excluded from them!”<sup>(7)</sup> また、トルボットの日誌の中で、“...what was my astonishment to find Colley there [the quarterdeck].” と、コリーが己の立場をわきまえずに行動していることに、周囲の人々が目を光らせている様子がありありと描かれている。(船内のquarterdeck〈後甲板〉は上級船客だけが遊歩する区域となっている。)そして皆はコリーのことを口にするさえ控え、まるで彼が神聖な人か、或は野卑な男かのどちらかであると思っている。即ち彼を普通の人間として扱っていないのである。彼は決して甲板に姿を現わさなくなった。上部甲板の中央部(waist)に彼が現われた時、あからさまに驚きの表情を皆が見せたからだ。「この船には牧師はいないのだ。」と言い切る者もいた。船の中では船長がオールマイティであるということを明確にしておくためである。

コリーは死ぬまで、自分が皆から避けられている存在であることを、脳裡に焼きつけられた。地上では丘陵とか樹木とか家屋などで遮られているからはっきり見えないものでも、ここ海上では世界の端々までもまる見えなのだ。

そういう隠れ所のない立場に追い込まれて、彼は身震いしはじめた。そして“‘I was alone!’”と叫ぶ。それからしばらくして、「ロバート・ジェイムス・コリー、お前は判決を受けるようになるぞ。」と言われ、余りの驚きと恐怖で彼の頭の中は動転した。生きる希望を捨て、自分の最後に向けて自分自身を適合させていこうと努力する。殺されようと、首船楼で何が起ろうと、逆説的にそのことを‘joyous’と感じている。トルボットは彼が‘joy! joy! joy!’と叫ぶのを実際聞いたのだ。

トルボットの日誌は自分自身をあくまでも中心に、周囲の人々の活動の小さな世界を描いている。船を望み通りの目的に向かって運行する、説明できる手段とみなしている。大自然、天候についてはほとんど何も考えない。彼は物事を表面の現象によってのみ判断し、彼のコリーについての見方は、中世的説明との類推に基づいている。しかし、トルボットはコリーの手紙を読んでいるうちに、はじめて自然の力と美に気づきはじめるのだ。コリーが‘I was alone!’, ‘joy’ と叫ぶ時、太陽は暖かく、自然の恩恵のように思われた。海は輝いている。ロマン派の詩人 Coleridge の *The Ancient Mariner* の詩の一節“Alone, alone, all, all alone/Alone on the wide wide Sea!”<sup>(8)</sup> と重複させている。太陽と月の間の調和を象徴し、昼と夜、明るさと暗さは人間性の内面の調和を象徴している。トルボットは自然の公正さや、自然の感情をうけ入れるようになる。今まで合理主義を強調する古典主義を認めていた彼は、コリーの手紙を読んだから、徐々にではあるが、ロマン主義的考え方へと移ってゆく。

コウルリジの詩を引き合いに出したのは、コリーではなく娼婦 Zenobia である。自由な考えをもち、あらゆる迷信に根強く反対する Mr Prettiman は迷信の愚かしさを証明しようとして albatross (あほう鳥) を射殺そうと決心する。ここでコリーはアルバトロスの役割を演じている。‘Christian Soul’であり、‘good omen’ とされるアルバトロスを射たことにより、様々な呪を受けなければならなかった老水夫 (the ancient mariner) は、“Yet I could not die”<sup>(9)</sup> という精神的な死に襲われる。この鳥を殺したことにより大自然の

秩序を乱すと同時に、創造的想像力をも失うことになるのである。アルバトロスを射殺すという行為の中には想像力の否定があるからだ。何故なら、アルバトロスは神聖な生命の象徴であり、「キリストの罪なき犠牲」を表わしているからである。

*The Ancient Mariner* に出てくるアルバトロスの死をめぐる解釈は、この詩の評論家によって様々な角度から検討されているが、コリーの死をめぐる、ゴールディングは様々な見方を乗組員を通して語らせている。トルボットはすべての人間の個々の性質に気づいてゆくにつれて、コリーの事件についての初期の考え方を変えてゆかなければならなかった。コリー自身は航海での出来事を笑劇としてではなく、悲劇として体験したのだ。笑劇又は喜劇と悲劇は、人間の本質が自然のそのように光と影、陽と陰、善と悪、で成り立っているという見方からすれば、この事件で二つは融合されている。コリーの死についての一つの説明は、全真理を解明しえない、という真理の本質に在るということである。コリーは自殺し、彼自身の生命は奪われたが、他の人々の態度と行動によって追いつめられての自殺なのだ。この小説の終りでは、“Men can die of shame.”<sup>09</sup>（人は恥辱で死ぬこともありうる。）と結論が出されるが、これは口先だけの原則で処理するには、余りにも複雑な問題をはらんでいる。

第一作の表題となっている ‘rites of passage’ は人類学上の用語であり、象徴的な意味をもっている。「通過儀礼」と訳されるが、個人がある集団から他の集団に移るとき、また、或年令から次の年令や世代へと移る時に行われる儀式であり、その儀式に相当するような経験や出来事にも使われる用語とされている。この小説の主題からいえば、変遷、推移について、作者は歴史の変遷というもう一つの重要な時を選んだ。人間のおかれている状態への一つの比喩として、啓蒙的な18世紀から、神秘主義と自然崇拜の19世紀初頭へと、そして更にロマン主義へと。一つの状態からもう一つの状態の間に存在し、変遷の儀式的根底にある神秘の内的重要性、決して完全には理解でき

ないが、現に存在している神秘の感覚、他者の感覚、異端とキリスト教の信仰の間の緊張感、これらの感覚が登場人物によって象徴的に扱われている。アンダーソン船長とプリティマン氏に象徴される無神論、トルボットに象徴される新古典主義（教会を社会の秩序の支えとする政治への信念）、コリーとゼノビアなど自由な無階級の人々に象徴される自然の秩序を尊重するロマン主義などである。

プリティマンは、詩人コウルリジと迷信をものともせず、銃をもってアルバトロスを破滅させるために発射しようとした。これは理性的な哲学者が思慮深そうに見えても、如何に理性がないかを意志表示するための行為なのである。「コウルリジ氏は誤解されていたことが分かった。水夫たちは迷信は信じているが、生命については特に意に介さない。彼等が海鳥を射殺さなかったのは武器をもつことを許可されていなかったことと、海鳥は食用には不味い肉だからである。」<sup>(4)</sup>と彼は言う。

コウルリジの詩を引合いに出し、19世紀ロマン主義批判と、18世紀小説との関連性を強調しながら、作者はトルボットの口を借りて、芸術の複雑性と真理の曖昧性を感じさせて、余音を残したままこの小説を終らせている。真理は動機とか、説明とか、個人個人の心理といった蓄積したものの背後に身を引くことを吾々に気づかせるのだ。

第二作 *Close Quarters* ではコリーの死と、あとを追うように自殺したウィラー、この二つの不祥事を引きずったまま航海は続けられる。トルボットの語りで、この作品の中で彼は民主主義の社会に批判的な考えをもち、ヨーロッパやイギリスでは王様や国家のために戦うという単純で解り易い義務から解放されたことが、すでに秩序ある社会を混濁とした情景に変えてしまった自由の拡大なのであったという。文化社会では、支配階級は生れながらにして定められている。このことは *Rites of Passage* でも将校サマーズが、

In our country for all her greatness there is one thing she cannot do and that is translate a person wholly out of one class into another.



Perfect translation from one language into another is impossible. Class is the British language.<sup>12</sup>

(わが国は偉大ではあるが、できないことが一つある。それは一人の人を或階級から別の階級へ完全に移すことができないことである。一つの言語を完璧に他の言語に翻訳することは不可能である。階級ということばは英国の言語なのである。)

と言う時、階級制度を変えてゆくことは難しいということと同時に、ヨーロッパの中でさえ、文化は容易に変えられないことを示している。一国の言語、文化的伝統は他国のそれと相容れないものがあるのだ。

第三作の *Fire Down Below* の中で、トルボットはプリティマン氏に、「あなたの航海の目的は何ですか。」と尋ねられて、「数ヶ月前ならば、自国の政府に於ける責任ある立場に適合することだと言っただろうが、今では私の野心の目的は違ってきている<sup>13</sup>」と答えている。そして、無知、無関心、という客観的立場で航海をはじめ、今は知ること、苦痛、気ままな希望、という主観的な物の見方でこの航海を終えようとしている。以前に自然に対してもっていた見方もだんだん変わり、自然とはあらゆる可能な方法で、吾々を信仰へと魅惑しようとしている。哲学的、精神的に人の心を和らげるものへと、吾々を引きずり込もうとしている。詩についても、この世のすべてのものについても、それ自体は神秘である。彼は詩を楽しむもの、気晴らし、美しいもの、と思っていたのだ。それが今では高尚な、崇高なものとして、自分の前に立ちはだかる。自然は途方もなく不条理なもので、彼は自然を理解しようとする気持をすっかり捨ててしまった。これが航海の終りではないにしても、終りの始まりであった。“the beginning of the end”<sup>14</sup> である。海から陸に上り、シドニー湾の海辺を歩いていたかもしれない。そこは自由の地であり、作物や羊の群れがのびのびと育ち、黒人の男女は一生懸命学び、仕事に精を出し、白人はそれぞれ小君主で、追われた囚人の一団と一緒に黒人を整然と保っている。トルボットの航海の物語は、地球の終末に向って終りを告げる。

即ち終末のはじまりなのだ。

1983年度ノーベル文学賞を受けた作家ゴールディングは、1911年9月19日イングランド南西端の州コーンウォールで生まれた。彼は英国海軍に一般水兵として入隊したこともあるし、第二次大戦では、ロケット弾を発射してピスマルク号を沈没させ、D-dayのノーマンディ上陸作戦にも参加した貴重な経験をもっている。従って、海的生活、戦艦の構造にも精通している。この海の三部作での長い航海の物語は、晩年の彼にとっての集大成となるかもしれない。

私はこの三部作を読み終えて、ギリシャの伝説に出てくるトロイの名将ユリシーズの航海の旅を想起した。ユリシーズが戦を終えて、故郷イサカのが家へ帰るまでの10年間の漂浪の旅の途中の冒険を述べているのが、Homerの*Odyssey*であるが、私が連想しているのは19世紀ヴィクトリア朝の詩人Tennysonの*Ulysses*である。テニスンの*Ulysses*のテーマはホーマーからではなく、Danteの*Divine Comedy*の‘Inferno’からであり、(Ulyssesは*Odyssey*のラテン語形であり同一人物)主人公の漂浪した後、わが家にたどり着いてから、最後の航海を回想している。語り手は老いたユリシーズであり、栄光はもう過去のものである。彼はまだ家庭的安らぎの場に不満をもつ人生への欲望はもっているが、それは精力のなくなった老人の欲望である。吾々は彼の最後の航海が、衰弱した力で行われるのだ、ということを知らなければ、その航海の感情的な意味を把握することはできない。これは老いた水夫たちによって夜決行された神秘的な船出である。彼等は死に至るまで、地の果てまで航海を続ける予定である。即ち死への旅である。

しかし、ここでは死というものは、最後の体験ではなく、老人にとっての出来る限りの体験である。死はコリーの様にわざわざ求められているのだ。テニスンは、ダンテのユリシーズに綿密に従っている。しかし情緒的な意味での相違は明らかである。ダンテには感情をみたく様なイメージとか、情緒的

な詩行はない。‘gray spirit’は老人の疲れ切った憧れを表わし、‘sinking star’はその憧れを失って消えてしまう方向へともってゆく。ダンテでは枝葉的なこと——ユリシーズが老いていること——が、テニソンの想像力をとらえ、中心的な事実となり、そこから意味が生れてきた。ダンテの描くユリシーズには、衰えてゆく精力の兆はない。ユリシーズは当然減じる運命にある。これは彼が人間にあてがわれた限度を越えて航海しようとするずうずうしさに対する罰としてである。彼を滅ぼす嵐は、彼があえて冒険に乗り出したことの禍である。テニソンのユリシーズは、乗り出す前から航海の避けられない到達点として、或かたちの死を約束している。

“‘Tis not too late to seek a newer world.”<sup>13</sup> このユリシーズの想いは、21世紀に向けてのゴールディングの心境を重複させているような気がしてならない。

註

- (1) ‘Interview with James Baker’ in *Twentieth Century Literature*, p. 132.
- (2) *Rites of Passage*, ¶p. 145.
- (3) *Ibid.*, p. 153.
- (4) *Ibid.*, p. 185.
- (5) *Ibid.*, p. 203.
- (6) ‘A Touch of Insomnia’ in *The Hot Gates*, p. 135.
- (7) *Op. cit.*, p. 233.
- (8) S. T. Coleridge: *The Ancient Mariner*, ll. 232-233.
- (9) *Ibid.*, l. 262.
- (10) *Op. cit.*, p. 278.
- (11) *Ibid.*, p. 73.
- (12) *Ibid.*, p. 125.
- (13) *Fire Down Below*, p. 202.
- (14) *Ibid.*, p. 252.
- (15) A. Tennyson: *Ulysses*, l. 57.

## William Golding の作品

Novels : *Lord of the Flies* (1954)

*The Inheritors* (1955)

*Pincher Martin* (1956)

*Free Fall* (1959)

*The Spire* (1964)

*The Pyramid* (1967)

*The Scorpion God* (1971)

*Darkness Visible* (1979)

*Rites of Passage* (1980)

*The Paper Men* (1984)

*Close Quarters* (1987)

*Fire Down Below* (1989)

Essays : *The Hot Gates* (1965)

*A Moving Target* (1982)

Travel : *An Egyptian Journal* (1985)

Play : *The Brass Butterfly* (1958)

Poem : *Poems* (1934)

### 主な参考文献

1. *William Golding ; A Critical Essay* by Paul Elmen, 1967.
2. *William Golding ; A Critical Study* by Mark Kinkcad, Weeks and Ian Gregor, 1967.
3. *William Golding* by Bernard F. Dick, 1967.
4. *The Novels of William Golding* by Howard S. Babb, 1970.
5. *William Golding ; The Dark Fields of Discovery* by Virginia Tiger, 1974.
6. *Of Earth and Darkness ; The Novels of William Golding* by Arnold Johnston, 1980.
7. *A View from the Spire ; Golding's Later Novels* by Don Crompton, 1985.
8. *William Golding ; The Man and his Books : A Tribute on his 75 th Birthday* ed. by John Carey, 1986.
9. *William Golding ; A Structural Reading of his Fiction* by Philip Redpath, 1986.
10. *The Modern Allegories of William Golding* by L. L. Dickson, 1990.

(はら ゆうこ 本学教授・人文学科英語研究室)